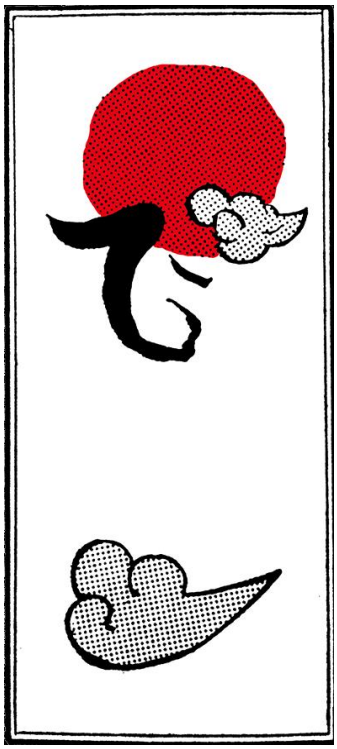

第 29 号
月 1 回 発 行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所：愛媛県西条市
上市甲 720-1

領　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道（八）（大和世界の建設）

竹葉　秀雄

古事記

宇宙の創始

―言（ことだま）―

ヨハネ伝第一章、十七、十八に

律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

律法は厳しいが、未だ地上には必要なものである。然し、最高のものではない。モーゼと其の律法はキリストと其の教の真髄たる愛に及ばず、神の心を真に知ったものは唯キリストのみ。キリストは神の最高顕現者なりと言えるのである。

私は言う、日本神道は言う。

万人万物皆神の懐裡にあり。神の愛し子にして、神の分霊なり、愛と光の身なり、これ未だ知らず、天照大御神、これを知らしめんとして皇孫日嗣の日子を天降らしめ給うと。

キリストの降臨は、日嗣の日子の降臨の道を顕現する顕現身にて道別命なり、その教は日本の真姿を知らしむる聖書なり。

ヨハネ伝福音書の著者は明かでないが、単純なるユダヤ式の教育を受けた人と思われず、ギリシャ哲学を学んだ人と思われる。道はギリシャ語の「ロゴス」で、第一意義は理性又は自意識、第二意義は言語で又は談話であって、神の代名詞として用いられていた。著者は、イエスの前生は神と偕に存する道であることを闡明したものであるが、ユダヤ人は智慧を人格に擬して神と共存し、且つ神が世界を創造し給うた時の智慧は造化に参与したものと信じたので、本書に難解の感を有せなかったであろうと、或新約研究者は謂い、また、本書の記者は、イエスは天地開闢の太初、神と共存し且つ神に代りて天地宇宙を創造し、終に之に生命ありとて有機物の中心点とした計りでなく、生命は進化して聡明叡智の霊的人格となり、此人格は世の光として暗き世を照せしも、暗き世の人は此光を滅そうとしたが、此光は尚赫灼として輝いてあった。悟らざりきは勝たざりきの方が可。とも書いている。これは、イエス即言とせるもので、「太初にイエスあり。」である。深意が汲み取られるが、「言」を普通に解して「響」「音」「声」としてもよいと思う。これについては後述の「言霊」を観て欲しい。

この著者は「はじめ」を「太初」と「太始」に書き分けている。何故か。古事記は「初発」としている。この事については後に記す列子のところを見て欲しい。

ロゴスについては、ゲーテのファストの悩んだところのもの、これも後述する。

第三章 農民生活の倫理的考察　菅原 兵治

～第二節 批判～

売名的態度

次は売名的態度であるが、之は已に前述せる通り農道生活の本質が「質」であって、政治家や官吏や軍人に比して世間的名声の現れ難い生活である。一体名を売ることなどに心を用いるようになることは何職業を論ぜずよくないことであるが、殊にも農道生活に於て然りとする。

菜根譚の教

菜根譚にも劈頭第一に「道徳を棲守する者は寂寞一時、権勢に阿附する者は凄涼万古。達人は物外の物を観、身後の身を思う。寧ろ一時の寂寞を受くるも、万古の凄涼を取ることなかれ」と教えているが、一時の世間的名声を得るなどいうことは、少しく深く考えて見れば実は万古に凄涼たることなのである。

誤れる農村指導

然かも近時の誤れる農村指導は兎もすれば農村及農村人をして売名的態度に趨らしむることなしとせぬ。所謂「篤農家」や「模範村」という名を獲んが為に如何に無理な偽飾的経営をさえなしつつあるであろうか。先般も或人から「何処か白粉を塗らない優良農村を見たいものだが……」と問われたことがあるが、少し真摯に農村を考えるものならば、何人も此の感を抱くことと思う。此の点からいって農村に於ける各種の表彰や、品評会、競技会等の施設なども十分注意しなければ、不知不識の間に村人を売名的態度に趨らしむることなしとせぬであろう。而して猶留意せねばならぬことは村人が各種の肩書欲しさに狂奔することである。農村の旧家が倒産する最大の原因は、株と政治（政党運動）とに手を出すことに因するといわれているが、政治に手を出すというのも、真に民の休戚の為に政治するというならば私共の大いに感謝すべきことであるが、その実は軽薄に名を誇ろうという一種の売名的根性から発す者がある為である。戒心すべきことであろう。

名は実の宝

然し此処に一言しておかねばならぬことがある。それは「名は實の宝」ということである。恰かも十分根に養分を蓄えて根幹が充実して来れば、自然と枝葉も繁って来るように、真箇に一身一家一村の実力が養われて来れば、これに伴う名も亦おのずと顕れて来るものであって、かかる實ある名ならば何も之を避くる必要も無く、否、却って大いに之を尊重すべきものである。佐藤一斉が其の著言志録に「名を求むるは素より非なり。名を避くるも亦非なり」と述べているが、自ずと生ずべき名ならば、之を故意に避くるということも、実は却って又「偽」に堕して非なるものである。偽飾的売名素より不可。偽飾的避名亦不可。要はなすべきことをなし盡して居ればそれで足りるので、名の有無は唯自然に委すればよいのである。婆心ながら敢えて一言蛇足を添える所以である。

環境と道義

三浦　夏南

自らが置かれている環境はその人間に重大な影響を与えるものである。強い集団に居れば、弱いものも自然にたくましくなるし、厳しい環境にあれば如何に怠惰なものも励むものである。資本主義社会の如く、個人中心で、功利的且つ打算的な社会に生息すれば、硬骨の武士も遅かれ早かれ軟弱な文化人に近づいてくる。勿論如何なる環境に置かれようとも、心を動かされぬ豪傑も存在するし、功利的な社会でも自らの節義を守り通す紳士も存在する。しかしそれも一世代限りのこと、国のため命を惜しまず戦い働いた日本男児が今どのような有様かを見れば、時の力の恐ろしさを思い知らされる。時の力はじわじわと押し寄せてくる。戦前を生きた人々がいた時代はまだ良かった。いや昭和という時代はまだ多分に古き良き時代だったのかもしれない。令和も進んでくれれば、平成までが日本と呼び得る最後の時代だったとまで言われることがないように祈りたい。

私は功利的な資本主義社会に生息しながら、日本精神なるものを語ることに偽善を感じずには居られない。日本精神とは結果であって原因ではない。そのよって来るところを極めて実現しなければどうしようもない。家族が大切だ、人倫だ、道徳だと言いながら、家業を捨てて会社に勤める父、家事を忘れてパートに行く母、親に仕えず学校で群れる子供たち、このような家庭のどこに人倫や道徳が育つ余地があるのか。そこに育つのは忠孝の誠心ではなく、功利的で打算的な社交術に過ぎないのである。敬神崇祖と言いながら、会社でもらったお金を使ってスーパーで買い物をしていたら、どんなに敬虔な人でも山川草木への感謝は怠るに至るであろう。しかしながら仕方がないではないか。こんな社会になってしまったのは私のせいではない。大きな流れには逆らい難い。会社に行かねば生活に困るし、学校よりほかに子供を行かす当てもない。妻にもパートでもしてもらわなければ、明日の生活にさえ困る始末である。ともかくそんなことを言ってもらっては困る。私はこの心の中にだけでも古き良き日本の価値観を忘れずに生きて行きたい。このように思われる人も多いだろう。そうしたい人はどうぞそのようにして頂きたい。しかし私はそこに偽善的なものを感じずには居られないのである。

資本主義社会は見方によれば、独善的で打算的な商人臭い軟弱な社会様式ではある。しかしながら一方で法を犯さなければ何でもありの自由な社会でもある。功利的なもの以外何も生まれない不毛な状態であるだけに、何でも新たに創造することが出来る。私は本質的にこの社会を憎悪するものであるが、憎悪するだけで、その社会の下敷きになって不平と理屈に埋没するものでもない。却ってこの無法な世の中を徹底的に利用すべきだと考えている。我々の目指す自治が無法状態な筈の室町戦国の時代に却って隆盛したように、金権に汚辱されたこの社会にこそ美しい自然に囲まれた村々を復興させ得るのである。これは、良い部分と悪い部分が共存しながら、それなりの形をとっていた明治以後から戦前までの世界では難しかったことである。

人の置かれた環境は大変な影響力を持っている。だからこそ、その環境をそのままにしておいて日本的価値観を守ろうとすることはしたければすれば良いが長期的に見れば不可能である。環境自体を変えなければならない、そうしなければ我々の大切な文化は滅んでしまう。しかし、日本を滅ぼしつつあるこの環境こそが、日本を再生する上でこの上なく適切な環境であると逆説的に私は考えているのである。

とよくも農園だより

三浦　杏奈

毎日暑い日が続きますが、お盆頃の猛暑が過ぎたあたりから、朝晩は少し涼しくなりました。日が落ちる時間が早くなって、夏の終わりを感じるこの時期は毎年少し寂しいような、秋の始まりが楽しみなような、不思議な気持ちになります。

今月から、里芋の畝間の灌水を本格的に始めました。基本的には三日に一回、全部の畝の半分くらいの高さまで水が溜まるよう、川の水を堰き止め、圃場にいれます。里芋を作付けしている畑が七枚あるため、一日二～三枚ずつローテーションして水を入れ、管理しています。止水板を外し忘れたり、圃場内にある排水部分から水が大幅に洩れたりしていると、同じ川の水を利用している方々に迷惑をかけてしまうので、毎回丁寧に確認しながら行っています。

実際に自分達が灌水を行うまでは、川の水を堰き止めて、圃場に入れるだけだと安易に考えていましたが、実際は、水が順調に圃場内に行き渡るようにするには様々な作業が必要でした。まず、畝間を管理機で通り、しっかりと水の通る道を作っておくこと。そして、圃場内にある、排水部分から漏れる水をしっかり止める板を作り、隙間はマルチや石などを使って水漏れを最小限に抑えること。里芋にとって、十分な水が圃場内に行き渡ることは非常に重要です。七枚の畑は、乾きやすさ、水の溜めやすさ、川の水量などがそれぞれ違います。初めて使用する圃場で、圃場ごとの特徴に合わせて行う毎日の灌水は、想像以上に大変で、慣れた頃には、九月になり、灌水があまり必要のない時期となりました。来年はもっと早くから各圃場で水をためる実験を行い、いざという時に焦らないで良いようにしたいと思います。

アスパラガスの収穫や里芋の管理の合間を縫って、家庭菜園の夏野菜を一掃し、秋冬野菜の定植に向けて畑の準備も行いました。息子たちと一緒に堆肥や肥料を入れ、耕し、種を蒔いた畑から頂くお野菜は、新鮮で美味しいのはもちろん、楽しい思い出と共に食卓にあがり、毎回の食事をより明るくしてくれると思います。野菜の生長過程も息子たちと共に楽しみ、大切に育てたいと思います。

来月から、ついに長い間成長を見守ってきた里芋の収穫が始まります。水不足による枯れや、疫病など心配も多くありましたが、何とか収穫まで無事辿りつきそうです。日中はまだ暑い日が続くようなので、熱中症に気をつけながら収穫に精を出したいと思います。

★今後の予定

来月も、今月に引き続き勉強会は休止致します。復帰の目途が立ちましたら、本稿にてご連絡差し上げます。

★一燈照偶　万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

・一般会員	三千円
・賛助会員	一万円
・特別賛助会員	三万円
・支援会員	一万円